

編集ノート

本誌に掲載した「《盛京時報》近代小説簡目」は、題名通りの「簡目」だ。作品名、掲載年月日など主要項目のみが抽出してある。本体は『《盛京時報》近代小説叙録』といい、作品紹介を含んだ詳細なものだ。近く単行本で刊行されると聞く 中国では現在、新聞小説研究の分野に注目が集まりつつある。過去においては想像もできなかった。阿英の「晩清小説目」が長年にわたって権威を持つ目録であったことを考えるとまさに新展開だということができる。阿英は単行本を主とし、雑誌から作品を少し採録した。新聞小説までは手が回っていない。当時、新聞をまとめて入手することは困難だったことが容易に推測できる。中国で新聞の影印、マイクロフィルム化が進んだのはここ20年くらいのことだろう。以前は、目録に収録したくても見ることのできない新聞ではどうしようもなかった 資料が整備されてくれば研究も進むというわけ。私が日常に利用している工具書には、以下のものがある。

陳大康『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社2002.12）、孟兆臣『中国近代小報史』（北京・社会科学文献出版社2005.10）。最近では、劉永文編『晩清小説目録』（上海古籍出版社2008）も刊行されている（書評を書いた。樽本「清末小説目録の最新成果 劉永文編『晩清小説目録』について」『東方』2009年5月号） 新聞小説が研究対象になってあらたな問題が生じる。阿英が主張した「翻訳は創作よりも多い」に関係する。阿英は自分の所蔵する単行本を数えた。だからそういう結論になった。しかし、雑誌掲載の小説を含めれば、阿英の主張は成立しない。さらに今までは手つかずの新聞小説がこれに加わると、ますます阿英説は旗色が悪い。それよりも作品数を数えること自体が無意味な行為になるのだ 重要なことのひとつは翻訳小説の中身を検討することだ。こんな翻訳小説があります、だけではすでにすまなく閉

清 末 小 説 第32号

定価 3,150円(本体3,000円)

発行 2009年12月1日

発行兼編集人 樽本照雄

発行所 清末小説研究会

〒520-0806 JAPAN 滋賀県大津市打出浜

8番4-202 樽本方

郵便振替 00990-6-40475

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

印刷所 木村桂文社